

## 平成 20 年度第 2 回企画展「日暮里再考」予告!!



図版 1 諏訪神社より見タル町全景ト筑波山遠望 (『日暮里町政治革史』より)

# 荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会  
荒川ふるさと文化館  
荒川区南千住6-63-1  
TEL 03(3807)9234  
登録 (20) 0037号

江戸時代の日暮里

江戸時代の日暮里は、台地上に寺社を配した風光明媚な場所として、また諏訪台・道灌山など眺望に優れたところとして知られていました（5頁参照）。一方で、台地の下は、江戸の市街地へ供給する蔬菜（野菜）の栽培や植木屋を営む近郊農村でした。中でも、西日があたらず清水の湧く場所での栽培に適していた「谷中生姜」の産地として知られていました。日暮里で作られる生姜は、スジがなく香りもよいとしてお盆の贈答用として使われたそうです。

変化する日暮里

図版 1 は、昭和の初め頃に撮影された写真です。諏訪神社のある諏訪台から筑波山を望むという点では、江戸時代の浮世絵や肉筆画とほぼ同じ構図です。浮世絵には、眼下に民家と思われる屋根が十数軒ある他は一面に田園が広がり、遠くに筑波山や日光連山が見える、そんな風景が描かれています（5頁上段図版）。しかし、写真では田園は全くなく、人家が密集した今の日暮里に近い姿になっています。この写真が掲載された『日暮里町政治革史』（昭和 5 年）の序によると、「日暮の里と呼びし江戸時代の詩人

日暮里と成田空港が凡そ 30 分で結ばれる予定です。まさに日暮里は大きな変革期にきています。しかし、これらは今に限ったことではありません。江戸から近代にかけても日暮里は大きく変貌しました。荒川ふるさと文化館では、この日暮里の移り変わりをテーマに、平成 21 年 2 月から 3 月にかけて企画展を開催する予定です。

今回は、その予告を兼ねて日暮里の昔の様子を少しのぞいてみましょう。

東側は、市街地再開発事業が行われています。また、平成 22 年度中には成田新高速鉄道が開業し、通しました。日暮里駅の

里駅から足立区の見沼代親水公園駅を結ぶ日暮里・舎人ライナーが開業しました。日暮里駅の

日暮里が変わった理由

日暮里に限らず区内の他の地域でも、多かれ少なかれ関東大震災や戦災などの影響でマチは変化しています。加えて日暮里は、区内で最初に開通した鉄道や「大火」などが要因としてあげられます。

日暮里に開通した鉄道は、日本鉄道株式会社が設置した東京と青森をつなぐ路線で、上野を起点に日暮里を経由し赤羽に向かうものでした。明治 16 年 7 月に試運転が開始され同 23 年には鉄道複線化工事も計画されています。その後複線化工事の際に、地域住民が東京府知事に宛てた「意見書」からは当時の日暮里の様子を窺うことができます。「自分共所有地ノ儀ハ、何レモ祖先遺伝ノ地所ナルノミナラズ、所ニ頼テ生計相當ミ来リタルモノナレバ、一朝此地所ヲ手放ス如キハ（中略）難渋ナリ」（『日暮里村土地収用法処分ノ件』明治 23 年（東京都公文書館所蔵））。つまり、鉄道の敷設により祖先以来の生業である農業や植木屋にかかる厳しい土地を手放さなければならなくなつたのです。

また、日暮里と言えば「大火」というくらい日暮里の火災は有名でした。第三日暮里小学校に通っていた人が修学旅行に行つたとき、「東京の日暮里から來た」というと「日暮里は火事の多いところですね」といわれたといいます（『日暮里の民俗』平成 9 年）。木造の家屋が立ち並び、狭い道のために、火災の際には、消防活動が困難を極めました。その後、道を広く格子状にするなどの区画整理が行われ、マチの様子がさらに変化していきました。

昔も今も変わり続ける日暮里。企画展では、こうしたマチの変遷を読み解き、日暮里について改めて考えます。是非、展示を見て、自分のマチの歩みを振り返つてみてください。新発見があるかもしれません。

（加藤陽子）

企画展  
「千住大橋」  
展  
こぼれ話  
⑤

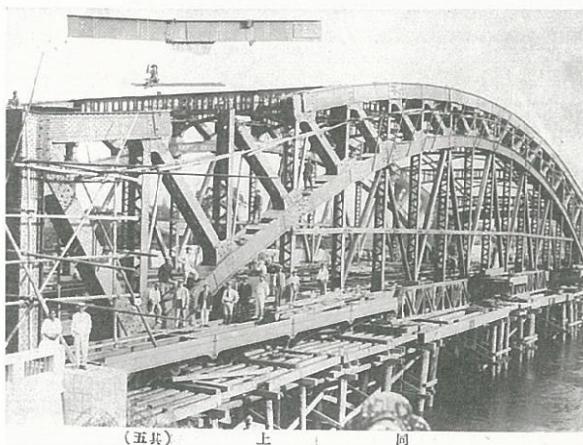
ついに発見！

## 千住大橋の報告書

企画展「千住大橋展」の会期が終わつて半年が過ぎた。私たちは、江戸時代以来、南千住で薬屋を営んできた飯塚家の蔵を調査させていただいた。飯塚家といえば、小児活生丸だ。子どもの疳の虫封じの薬で、先の展示でも「千住大橋南」と刻まれた小児活生丸の看板（区登録有形民俗文化財）をお借りして展示しているので、ご記憶の方もいらっしゃるだろう。

実をいうと企画展には準備中に探し出せず、結局展示できないという資料が往々にしてある。時効というわけではないが、「千住大橋展」でもいくつかあって、その中には、『第四号国道同大橋改修工事概要』という資料があつた。昭和 2 年（一九二七）の千住大橋鉄橋化工事が完了にあたつて作られた、いわば事業報告・記念誌で、ついに発見できず、足立区立郷土博物館がお持ちの写真版をお借りして、紹介させていただいた。

その後もずっと気になつていたのが、飯塚家の蔵の中に置かれた本棚にひよっこりと顔をのぞかせていて。なぜ飯塚家にこの本があつたのかよく分からぬが、「千住大橋南」を所在地とする飯塚家に何らかの縁があつたことは確かだろう。



（五其）上 同

改めて同書を眺めてみると、やはり本物、写真は鮮明で、工事中の臨場感や、「新品」の千住大橋の姿は魅力的である。

それともう一つこの本の表紙にあるタイトルを見てハツとした。「改修」という言葉が用いられている。ということは、昭和 2 年のこの時、木橋から鉄橋になつた千住大橋は、新たに造つたのではなく、あくまで「改修」と位置付けられていたのである。現在の千住大橋も徳川家康が架けて以来、「継続」して架かつっているのである。

その日暮里台地の上に向かう人には、これまで「改修」と位置付けられていた千住大橋は、新たに造つたのではなく、あくまで「改修」と位置付けられていたのである。現在の千住大橋も徳川家康が架けて以来、「継続」して架かつているのである。

橋だということの再発見にもなつた。

時代を遡つた江戸時代でも、いろんな目的・理由から、台地を目指した人々がいたことは、変わらない。ただ、その多くは、四季を通して景色やこの地域が持つ風情を楽しむ、遊興を目的として、足を運んだと思われる。日暮里台地は、当

時、雪見寺・月見寺・花見寺を抱えた景勝地「日ぐらしの里」、そして虫聴き・菜草摘み・眺望を楽しむことができる「道灌山」を抱えていたのだ。

ここを訪れる人は、まず台地からの眺望を堪能する。例えば、歌川広重が描くところの『名所江戸百景』の「日暮里諏訪の台」を見れば、眼下に田園風景が広がり、その先に隅田川を行き交う船が、遙か遠くには筑波の双峰が描かれている。さて、こ

## お買いもの③

あれしい  
— 錦絵から日暮里台地への眼差しを読む —



〈野尻かおる〉

こに掲げたのは、歌川国芳が描くところの『七ついろは東都賦紫尽』（嘉永 5 年）の『道灌山』の方が、通りが良いーを思い浮かべることだろう。

その日暮里台地の上に向かう人には、それなりの理由や目的がある。ある人は、ここを住まいとしているだろう。そしてその家を訪ねる人もいるだろう。また、買い物のため、墓参り、寺社詣でのために向かうだろう。最近では、まち巡りや史跡巡りの元気な東京ウォーカー達も台地を目指して歩いている。

江戸の人々が、江戸近郊の景勝地に期待していたのは、彼らにとつての日常である江戸という街の風景から解放されることだつたのではなかろうか。この錦絵は、そんなことを考えさせる一枚である。

# 職人

## こぼれ話 ④



### 人形頭

マキワラに飾られた様々な種類の人形頭（図版）。人形頭ひとつは、それぞれ人形を構成するパーツの一つですが、きれいな顔立ちの雛、かわいらしい木目込雛、華やかな花魁、迫力ある隈取りの歌舞伎の暫、勇壮な武者など、多様な人形の頭が一同に飾られた様子は、ひとつの芸術作品のようです。これらの人形頭はあらかわの職人高久秀芳さんの作品です。

人形頭とは 江戸の人形づくりは工程を複数に分け、分業制がとられてきました。①桐塑（桐の粉を正糀糊で固めたもの）製の人形生地をつくる。②人形生地に目を入れ、胡粉（牡蠣などの貝殻を挽いて作った白色の顔料）を塗つて輪郭を形作り、顔の表情や髪の生え際を描き、人形頭を仕上げる。③人形頭に結髪をする。④人形の胴を作つて衣裳を着せ、結髪された頭を取り付けて、ひとつの人形組み上げる。以上、四工程にそれぞれ専門の職人がおり、高久さんの人形頭の技術は②にあたります。

単に人形頭といつても、人形には様々な種類があります。今、ほとんどの人形頭の職人は、雛人形専門とか市松人形専門というように、一種類のみしか作らない場合が多いですが、高久さんは、この道59年。長年かけて先述したように多様な種類の人形頭を作れる技術を修得したそうです。人形の種類によって、その頭の輪郭や表情はもちろん、生え際の描き方、目の種類も異なります。これらを熟練の技術により、みごとに作りあげるのです。

くりの技法の特徴のひとつに、桐塑製の人形生地に、湯で硬めに溶いた胡粉と膠を混ぜたものを、筆で盛るように塗つて顔の輪郭を形作つていく「おきあげ」という技術があります。生地には簡単な輪郭は付いていますが、「おきあげ」をすることで、その輪郭は明確になり、あとで表情を描く時にも人形の顔に豊かな表情を生み出せるそうです。

しかし、現在、伝統的な技法の頭が減り、安価な中国産の石膏製の頭が台頭してきています。近頃の安価なものを求める消費動向とあいまって、石膏製人形頭が人形業界に広まり、結果、作るのに時間がかかるかつて単価が高い伝統的な人形頭の注文が減つて、打撃を受けることになりました。人形の産地として有名な岩槻（現さいたま市）をはじめとして、全国的にみても伝統的技法で人形頭をつくる職人が年々減り続け、今では高久さんを含め、数えるほどになってしまったそうです。

需要は減つたとはいえ、幸いなことに、伝統的な人形頭にこだわる人形屋は岩槻など各地に少なからず存在します。高久さんのもとには、完成度の高い人形頭を求める職人から、製作依頼が来るそうです。



平成19年度、高久さんの人形頭の技術は荒川区指定無形文化財となりました。荒川区では「伝統に生きる」という伝統工芸技術の記録映画を制作しています。今年度は高久さんの技術を映像化する予定です。ご期待ください。  
（澤田善明）



## 広重肉筆画

「日暮の里諏訪乃台」を  
ご紹介！

今回は西日暮里 3 丁目の諏方神社に保管されている絹本の絵画を紹介します。これは江戸時代の浮世絵師・歌川広重の肉筆画とされ、「日暮の里諏訪乃台」と題されています。この絵は現在、額装して保存されていますが、天地に一文字という装丁跡が残されていることから、もともとは軸装されていたと考えられます。

## 描かれた「ひぐらしの里」

西日暮里 3 丁目付近は、江戸時代、台地上から見渡す田園風景と、虫聴きなど四季折々の風情を楽しむことができました。遠くは東の筑波山、西の富士



広重肉筆画「日暮の里諏訪乃台」

こうしたことから、「日暮らしの里」は、絵の題材としても良く取りあげられました。江戸時代では歌川広重の「名所江戸百景」や「東都名所」、明治時代では月岡芳年の「東京開花狂画名所」、昇斎一景「東京名所四十八景」などがあります。特に広重は、初代から 2 代目、3 代目にわたって「日暮らしの里」を描きつづけています。本作が初代広重の筆によるものかどうかはまだ分かりません。広重がこのほかにも日暮里を多く描いていることから、その可能性を否定することはできないでしょう。

## 「日暮の里諏訪乃台」の内容

本作品では、諏訪台から新堀村を眼下に、遠く筑波山を見渡す風景が、訪れた人びとともに描かれています。縁台に座る人は三人おり、その手前には、傘を差す三人組。また、三人連れで歩いているなかの左端の一人は少女と思われます。この少女が持っている傘は、紙に描いたものをあとから切り貼りして付け足しています。描き忘れたのでしょうか。少女の持つ傘は、広重の意外な一面を窺わせていました。境内に目を移すと、他の浮世絵にみられる茶屋が軒を連ね、一服する人などで賑わう様子は見えませんが、木の枝に咲き誇る桃色の花は桜でしょうか。季節は春と思われます。

「日暮らしの里」の修性院、青雲寺などの寺は「花見寺」と称され、桜やツツジの名所として有名でした。「諏訪台といえば桜」という連想が江戸の人びとの共通認識としてあつたのでしょう。江戸時代の風俗や地誌を著した斎藤月岑の『東都歳事記』(天保九年(一八三八)刊)にも、八重桜の名所として



現代の筑波山方面を臨む諏訪台からの風景

【参考】展示解説図録『ひぐらしのさと～江戸の名所と文人たち～』(平成15年)

崖下から上つてくる人の姿がありますが、ここが地蔵坂と思われます。現在も諏訪台に上る坂道として使われており、歴史的な景観が残されています。

諏訪神社を訪れることがあれば、広重が目にした風景を思い浮かべて、台地からの眺望を楽しんでみてはいかがでしょうか。

〈斎藤照徳〉

## 報告書刊行のお知らせ

### ■町屋四丁目実揚遺跡B地点、C地点の発掘調査報告書が完成しました。

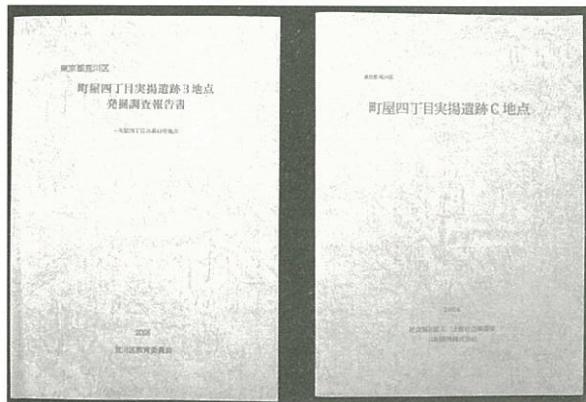
町屋四丁目実揚遺跡は、弥生時代末期～古墳時代前半を中心とした遺跡です。区内のみならず、隅田川流域の微高地上(低地より少し高まった土地)での人びとの暮らしを知る上で、大変貴重な資料が発見されています(B地点は文化館だより18号、C地点は19号参照)。

発掘調査報告書は、調査の結果を記録保存したものです。どのような遺構があったのか、どんな遺物が出てきたのか、現地調査で記録した図面や写真などのデータを使って分析し、考察を加えて報告書にまとめています。

発掘調査報告書は専門的に書かれているので、内容を把握するには難しい部分もありますが、報告書の後ろに掲載されている「報告書抄録」のページで、発掘調査した場所、発掘された遺構・遺物など遺跡の概要を見ることができます。

今回刊行した報告書は荒川ふるさと文化館1階郷土学習室や区内各図書館で閲覧できます。また、区内各図書館で貸し出しきますので、興味のある方は是非ご覧下さい。

なお、今年度はD地点の整理作業が始まっています。刊行の際はお知らせいたしますので、こうご期待!



### ▼文学館からのお知らせ

平成二〇年度 吉村昭記念企画展 作家・吉村昭の誕生

期間：二〇〇八年一〇月二五日（土）～一月二十四日（月・祝）

所：荒川区立荒川ふるさと文化館一階企画展示室

内容：荒川区に寄託された吉村昭氏の関連資料を中心に、太宰治賞を受賞した昭和四一年前後

の吉村作品を紹介する。  
問合せ：荒川区教育委員会事務局社会教育課文学館調査担当  
○三一三八〇二一三一一（代）内線三三五三

## 文化館でお買い物

今回は平成20年度企画展「皆川号外コレクション目録1・2(合冊)」CD-ROM版のご紹介です。

本目録は1994年に発行された冊子版の皆川号外コレクション目録(非売品)をPDF化したものです。これまで探すのに手間がかかった人物や事件の記事も検索機能で効率的に探すことができます。この目録を利用して、新聞から歴史を紐解いてみてはいかがでしょうか。

CD-ROM版は荒川ふるさと文化館展示室入口で350円にて販売しています。



## 計 報

- 荒川区登録無形文化財(木版画摺)保持者、三田村喜夫氏(享年67歳、南千住)は、去る平成20年4月27日に逝去されました。  
謹んでご冥福をお祈りいたします。